Shinshu University Journal of Educational Research and Practice，*No.14*，pp. 197-206，2020
信州大学教育学部研究論集　第14号　pp. 197-206　2020年

＜研究報告＞

中学校教員のジェンダーに関する意識と実態

－長野県中学校教員への質問紙調査を通して－

鳥毛彩花　　藤岡市立鬼石中学校
鄭　暁静　　信州大学学術研究院教育学系

キーワード：長野県，中学校教員，ジェンダー，男女平等教育，性別役割分業意識

１．はじめに

ジェンダー観を規定する要因としては家庭環境や学校教育，メディア等が挙げられる。中でも学校教育は，児童・生徒の日常生活との深い関わりから，学校の中でフォーマルに，または潜在的に社会化される性別役割分業に着目した研究が蓄積されてきた。制度上の学校教育は男女平等となってきてはいるものの，教科書におけるジェンダー・バイアス的な表現，教員の意識や行動等，児童・生徒の性別役割分業を助長するような隠れたカリキュラムの課題は絶えず指摘されている。特に，教員は児童・生徒に直接的に働きかける存在として，教員のジェンダーに関する意識や行動が，児童・生徒のジェンダー観の形成に与える影響は大きいと考えられる。このようなことから，教員のジェンダー観に関する研究も見られる。例えば，多々納・田原(2001）の島根県の教員を対象とした研究，苫米地(2009)の東京都，神奈川県，福島県の教員を対象とした研究等があり，いずれの研究結果においても教員（特に男性教員）の性別役割分業意識と性別役割分業行動の存在が明らかとなった。

長野県では，1980 年に策定した「長野県婦人行動計画」から，現在の「男女共同参画計画」に至るまで，男女共同参画社会の実現に向けた施策を約 40 年間続けてきた。2016 年には「第 4 次長野県男女共同参画計画」を策定し，「男女共同参画の基盤づくり」の施策において，男女共同参画の理解を深めるための教育・学習の充実を図るとしている。学校教育としては，「子どもたちの発達段階に応じて，男女共同参画社会に関する題材の授業への位置づけ等，計画的に男女平等への理解を深める教育を推進する」と掲げられており，このような教育施策において，実際に授業を展開する教員を対象に，ジェンダーに関する意識や行動，授業実践の実態を明らかにすることは，具体的な取り組みや隠れたカリキュラムの課題を見える化し，これからの男女平等教育を展望する上で重要な基礎資料になると考えられる。

そこで本研究では，長野県の中学校教員を対象に，ジェンダーに関する意識や行動，授業実践等について質問紙調査を行い，その実態と課題を明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

本調査の対象者及び調査方法は長野県の国公立中学校 64 校の教員（453 人）を対象に，質問紙郵送法によって行った。具体的には，まず，長野県の中学校一覧から国公立中学校一覧（188 校）を作成し，乱数関数を用いて対象校を無作為に選択した（全校中 72 校，38.3%）。次に，学校ごとに調査の協力を依頼し，同意を得た中学校 64 校に質問紙を 10 部ずつ郵送し，記入後，返送してもらった。なお，郵送した 10 部の回答者の依頼は管理職と養護教諭以外の教員とし，性別と年代が偏らないようお願いした。教員の担当教科，配属学年は指定していない。

調査時期は 2018 年 10 月 25 日から 11 月 2 日に発送し，2018 年 11 月 9 日までに返信してもらった。有効回答数は 453 人（有効回収率は 70.8%）である。回答者の性別及び年代は表 1 に示す通りである。調査内容は多々納・田原（2001）の質問項目を参考に一部を修正し，一般的な性別役割分業意識，学校における性別役割分業意識，生徒に対しての性別役割分業行動，ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等の参加経験，男女平等教育の実践等について尋ねた。なお，性別役割分業意識や性別役割分業行動については，性別・年代・婚姻状況による違いを分析した。本稿では，性別による分析結果を報告する。

表 1　回答者の性別と年代構成　　人（%）

	男	女
20 代	57（22.9）	50（24.5）
30 代	61（24.5）	50（24.5）
40 代	60（24.1）	52（25.5）
50 代以上	71（28.5）	52（25.5）
計	249（100.0）	204（100.0）

３．研究結果

3.1 一般的な性別役割分業意識

一般的な性別役割分業意識に関して，多々納・田原（2001）の質問項目を参考に 5 つの質問項目を設け，それぞれに対し「そう思う」4 点から「そう思わない」1 点の 4 段階評定尺度で尋ね，得点化した。その後，性別によって違いがあるか否か t 検定を行った（表 2）。

その結果，「④能力や資格があれば，性別に関係なく昇進の機会は平等に与えられるべきだ」以外の 4 つの項目において女性の得点が高く，女性の方が男女平等意識が高いことが明らかになった。さらに，「③固定的な性別役割分業意識は男女それぞれの自立を阻んでい」「⑤男女とも家事を行い，仕事をもてる社会にするべきだ」の質問項目は 5%水準で有意差が認められ，女性の方が自立や家庭と仕事の両立に関して特に男女平等を意識していることが明らかになった。一方，職業における昇進については，男性の方が意識が高く，管理職に男性教員が多いことに批判的に思っていることが分かった。労働政策研究・研修

機構（2013）によると女性は男性と比べて昇進を望んでいない傾向にある。女性における家庭と仕事の両立に関する現実課題が，このような回答に影響しているものと考えられる。なお，「③固定的な性別役割分業意識は男女それぞれの自立を阻んでいる」は男女とも他の項目より得点が低く，性別役割分業意識が自立を阻む要因としては考えていないことが分かった。

表 2　一般的な性別役割分業意識（t 検定）

		平均	標準偏差	t 値
①育児休業は男女いずれが取ってもよい	男	3.76	0.47	-1.30
	女	3.82	0.39	
②親が寝たきりになった時，女性，男性いずれも介護するべきだ	男	3.77	0.47	-1.63
	女	3.84	0.40	
③固定的な性別役割分業意識は男女それぞれの自立を阻んでいる	男	3.03	0.86	-2.45*
	女	3.22	0.76	
④能力や資格があれば，性別に関係なく昇進の機会は平等に与えられるべきだ	男	3.91	0.29	1.34
	女	3.87	0.33	
⑤男女とも家事を行い，仕事をもてる社会にするべきだ	男	3.67	0.57	-2.51*
	女	3.79	0.46	

*…$p<0.05$

3.2 学校における性別役割分業意識

学校における性別役割分業意識に関して，多々納・田原（2001）の質問項目を参考に 6 つの質問項目を設け，それぞれに対し「そう思う」4 点から「そう思わない」1 点の 4 段階評定尺度によって得点化し，平均点を算出した。その後，性別によって違いがあるか否か t 検定を行った（表 3）。

表 3　学校における性別役割分業意識（t 検定）

		平均	標準偏差	t 値
①生徒に男らしさ，女らしさを押し付けてはいけない	男	3.29	0.73	-2.57*
	女	3.46	0.63	
②名簿は男女混合であるべきだ	男	3.30	0.92	-1.10
	女	3.39	0.76	
③「…さん」など生徒の呼び方は男女同じにした方が良い	男	2.51	0.94	-4.63**
	女	2.90	0.83	
④生徒指導は教員の性別に関係なく，同じように行うべきだ	男	2.75	1.02	-2.01*
	女	2.94	0.93	
⑤進路指導は性別によって制限することなく，生徒個々の能力に応じて行わなければならない	男	3.84	0.44	0.60
	女	3.81	0.44	
⑥学校行事における受付，接待，お茶入れなどの仕事は男女いずれの生徒が行ってもよい	男	3.74	0.60	-0.79
	女	3.78	0.57	

**…$p<0.01$　*…$p<0.05$

性別による結果を見ると,「⑤進路指導は性別によって制限することなく，生徒個々の能力に応じて行わなければならない」以外の 5 つの項目において女性の得点が高く，学校における性別役割分業意識も女性の方が男女平等意識が高いことが明らかになった。さらに,「③『…さん』など生徒の呼び方は男女同じにした方が良い」の質問項目は 1%水準で,「①生徒に男らしさ，女らしさを押し付けてはいけない」「④生徒指導は教員の性別に関係なく，同じように行うべきだ」の質問項目は 5%水準で性別に有意差が認められた。すなわち，女性の方が生徒の呼び方や生徒指導に関して特にジェンダー・フリーを意識していることが分かった。しかし，全体的に男女とも「③『…さん』など生徒の呼び方は男女同じにした方が良い」「④生徒指導は教員の性別に関係なく，同じように行うべきだ」の質問項目は得点が低く，生徒の「さん」「くん」のような呼び方が習慣化されていること，生徒指導における男性教員・女性教員の役割が固定化されている学校文化の様子が伺えた。

3.3 生徒に対しての性別役割分業行動

生徒に対しての性別役割分業行動に関して，多々納・田原（2001）の質問項目を参考に 5 つの質問項目を設け，それぞれに対し「そうする」4 点から「そうしない」1 点の 4 段階評定尺度によって得点化し，平均点を算出した。その後，性別によって性別役割分業行動に違いがあるか否か t 検定を行った（表 4）。

表 4　生徒に対しての性別役割分業行動（t 検定）

		平均	標準偏差	t 値
①生徒に「女（男）だから…」と言う	男	1.88	0.79	-0.17
	女	1.89	0.73	
②重たい荷物を運ぶとき，男子に頼む	男	3.42	0.75	3.78**
	女	3.16	0.72	
③整理整頓の作業は女子に頼む	男	1.92	0.84	2.73**
	女	1.71	0.78	
④女子の言葉，服装はより注意する	男	1.59	0.69	-0.86
	女	1.65	0.79	
⑤男子の化粧やピアスはより注意する	男	1.40	0.67	1.66
	女	1.30	0.56	

**…p<0.01

その結果，質問項目によって男女の得点の高低が分かれた。「①生徒に『女（男）だから…』と言う」「④女子の言葉，服装はより注意する」の項目においては女性の平均点が高く,「②重たい荷物を運ぶとき，男子に頼む」「③整理整頓の作業は女子に頼む」「⑤男子の化粧やピアスはより注意する」の項目においては男性の得点が高かった。さらに，男性の得点が高かった「②重たい荷物を運ぶとき，男子に頼む」「③整理整頓の作業は女子に頼む」の質問項目は 1%水準で性別に有意差が認められた。力仕事は男子，整理整頓のような細かな仕事は女子というように，男女への性別役割分業に沿った指導をしていることが分か

った。男女ともほとんどの質問項目の得点が低く，全体的に生徒に対する性別役割分業行動には否定的である。「②重たい荷物を運ぶとき，男子に頼む」の項目は他の項目より平均点が高かったが，これは男女生徒の身体的な発達状況の差異によって判断されているものと推測される。

3.4 ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等の参加経験

（1）研修・講習会等の参加経験の有無

ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等の参加の有無について尋ねた結果，参加したことが「全くない」という回答が 338 人（75.1%）で最も多く，次いで「2 回以上ある」という回答が 67 人（14.9%），「1 回ある」という回答が 45 人（10%）であった。半数以上が参加したことがないと答えており，全体的にジェンダーや男女平等教育をテーマとした研修・講習会等の経験が少ない傾向にあることが分かった。

続いて，参加したことがないと回答した教員に対して，その理由を尋ねたところ（表 5），「③機会がなかった」という回答が 182 人（55.7%）で最も多かった。文部科学省が毎年行っている「初任者研修実施状況」や「10 年経験者研修実施状況」の調査によると，人権・男女共同参画についての研修を行っている教育委員会は，初任者研修では約 80～90%，10 年経験者研修では約 40～50%となっているが，本調査において，長野県におけるジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等の機会自体が少なかったと言える。ジェンダーや男女平等教育に関する関心や課題意識を持てるよう，まずは研修・講習会等の機会の拡大が求められよう。

表 5　講習会に参加したことがない理由　　人（%）

	度数
①知らなかった	66（14.6）
②興味がなかった	40（12.2）
③機会がなかった	182（55.7）
④研修・講習会を受けたいが，他の研修・講習会を優先していた	22（6.7）
⑤その他	17（5.2）
計	327（100.0）

（2）参加した研修・講習会等の具体的な内容

ジェンダーや男女平等に関する研修・講習会等に参加・受講した経験が「1 回ある」「2 回以上ある」と回答した教員に対して，参加した時期，研修・講習会のタイトルや企画した団体，内容を尋ねたところ（表は省略），時期は今年度に開催されたものから 20 年程前に開催されたものまで様々な回答が見られた。参加した研修・講習会等は学校内の勉強会や教育委員会の研修という回答が最も多かった。また，大学での学習経験も複数挙げられ

ている。内容は，雇用や働き方における男女平等，LGBT に関する回答が多く，特に，LGBT についての研修・講習会等についてはここ数年で開催されたものが多く見られ，近年，学校において LGBT の子どもたちへの対応が課題となっており，教員たちの関心が高まっている様子が伺えた。なお，LGBT とジェンダー平等はどちらも人権の尊重という視点によるものであり，どちらも課題として挙げられるが，多くの教員がジェンダーと LGBT の両単語を混同している様子も見られた。

（3）研修・講習会等を受けた後の変化

ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等の経験が，自身の教育のあり方に影響しているか否か尋ねた。その結果，「①そう思う」が 32 人（31.4%），「②少しそう思う」が 38 人（37.3%），「③あまりそう思わない」が 23 人（22.5%），「④そう思わない」が 9 人（8.8%）だった。「そう思う」「少しそう思う」という回答を合わせて約 7 割の教員が，ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等の経験が，自身の教育のあり方に影響していると考えていた。具体的にどのようなところが変化したのかを尋ねると，表 6 に示す通りに，大きく「自分の意識・行動に注意」「生徒への接し方」「授業・指導の場面」「LGBT について」に分類された。ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等の経験により，自分自身の考えや行動だけでなく，学校現場における生徒への接し方や男女平等教育の実践において肯定的な変化があることが明らかになった。

表 6　ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等を受けて変化したこと（回答例）

自分の意識・行動に注意	・子育ては妻に任せきりでなく，自分もできる範囲で関わっている。（30 代男性） ・自分の中の「あるべき」像が変化した。（50 代以上男性） ・日々のニュースや人権の問題など同じ職場の先生方と話したりして，自分の中でいろいろ考えるようになっている。（50 代以上女性）
生徒への接し方	【男らしさ/女らしさ】 ・生徒に，「男らしく」「女らしく」というような発言をしなくなった。（20 代女性） ・男らしくとか女らしくとか言わなくなった。（50 代以上女性） 【呼び方】 ・男女問わず「さん」と呼ぶようにしています。（20 代女性） ・生徒の呼び方を「○○さん」と，男女ともかえた。（50 代以上男性） 【接し方】 ・男子と女子への接し方をいかに平等にするか。（40 代男性） ・係決めなど，決めごとに対して，男女平等を意識している。（50 代以上男性） 【性別より個の尊重】 ・同じように（男女問わず）個性の違いととらえる。（30 代女性） ・性別によらず個の姿から指導にあたる意識が強くなった。（40 代男性）
授業・指導の場面	・生徒に対する言動，ジェンダーフリーについての指導についての見通しがもてて安心して指導できるようになった。（40 代女性） ・指導場面で扱う必要があるか考えるようになった。（50 代以上女性）
LGBT について	・同性愛などについて面白がって話題にしないようになった。（20 代男性） ・生徒の中にも性的マイノリティーの生徒がいることを前提に対応している。言動にも配慮している。（50 代以上女性）

一方，ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会が自身の教育のあり方に影響していると「思わない」「あまり思わない」と答えた教員に対してその理由を尋ねたところ（表は省略），「新たに得たことがなかった」「思い出す事がない（記憶に残っていない）」というような回答が多く挙げられた。さらには「勉強はしたが自分の教育のあり方にまだつなげられていない」「日々学習しているため研修・講習会の影響だと考えない」等の回答も見られた。ジェンダーや男女平等教育に関する最新事情や実践に繋げられるような内容改善が求められる。なお，これらの回答には性別や年代に大きな偏りは見られなかった。

（4）今後のジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等への参加希望

今後のジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等への参加希望について尋ね，性別に違いがあるか否かχ^2検定を行った（表 7）。

表 7　今後の研修・講習会等への参加希望（χ^2検定）　　人(%)

	男	女	合計	χ^2値
①思う	105(42.5)	120(59.4)	225(50.1)	12.689**
②思わない	142(57.5)	82(40.6)	224(49.9)	

**…p<0.01

その結果，男性は受けたいと「②思わない」人が多く，女性は受けたいと「①思う」人が多く，1%水準で性別に有意差が認められた。内閣府男女共同参画局（2016 年）によると，社会の様々な場面で男女平等だと思う人の割合は男性の方が多いことが明らかになっている。男性より女性の方が男女平等に課題意識を持っており，本調査においても，女性教員における課題意識がジェンダーや男女平等教育に関する関心・意欲に繋がっているものと考えられる。

さらに，ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会を受けてみたいと「思う」と回答した教員に対して，具体的にどのような内容の研修・講習会等を受けてみたいか尋ねたところ（表は省略），「ジェンダーの基本的な概念について」「ジェンダーの現状の実態について」「学校で実践できる指導の在り方について」が多く見られ，その他「LGBT について」「身体的・情緒的性差について」「学校外での男女平等の在り方について」等の回答も見られた。

3.5 男女平等教育に関する授業実践について

（1）男女平等教育に関する授業実践の経験

男女平等教育に関する授業実践の経験があるか否か尋ねたところ，「ある」と回答した教員が 168 人（38.8%），「ない」と回答した教員が 265 人（61.2%）であった。30 代，40

代，50 代においては実践経験の有無が約半々に分かれたが，20 代においては 8 割の教員が「ない」と回答していた。20 代の教員はまだ現場に入って数年しかたっておらず，授業実践の経験自体が少なかったものと考えられる。なお，性別による違いは見られなかった。

(2) 男女平等教育に関する授業実践の内容

男女平等教育に関する授業実践をしたことが「ある」と回答した教員に対し，具体的にどのような授業実践を行ったのか，その教科と内容を尋ねた。その回答例を表 8 に示す。なお，本研究では調査対象者における教科の指定・制限をしていないため，回答が得られた者の中で限られた教科の実践例を確認する。

表 8　男女平等教育に関する授業実践の内容（教科別回答例）

国語	・現代文（ジェンダー論が書かれている評論）や古典作品（特に平安（源氏，枕，竹取）など）において（30 代女性） ・文法の「らしい」の識別をするときのひとコマ（50 代以上女性）
社会	・公民 日本国憲法の平等権に着目して，男女差別がわかる資料をみせた上で「家庭における男女の協力を考えよう」というテーマでロールプレイを行いました。木曽はすもうがさかんで，すもうの「女人禁制」の伝統から男女差別を身近に感じている生徒もいました。「みんな同じことが当たり前」ではなく，「一人一人違うことが当たり前」だと実感できるように日々の授業をしています。（20 代男性） ・「本当の男女平等とは何か」を労働人口や賃金格差などの資料から考える。（20 代男性） ・歴史，公民のあらゆる場面で潜在的に時に顕著に，あるいは基盤としてかかわってくるのがジェンダーだと考えているので，授業の端々に出ます。（30 代男性） ・公民の学習で憲法上の平等やジェンダーフリー，男女共同参画社会基本法，男女雇用機会均等など具体的な事例を学習している。（50 代以上女性）　など
数学	・授業の発言や指名で，男女を考えることがあまりない。（40 代男性）
理科	・男女の特性（役割ではなく）を学べるようにしている。（40 代女性） ・実験で，とにかく男子が積極的に手を出して女子がやりたくても一歩引いている状況ができやすいのでその際は個別に話しかけている。（50 代以上男性）
音楽	・混声合唱のパート分けの際，男女の違いと認め合う気持ちを持たせたいと願っています。互いの声の美しさや尊さについて（40 代女性）
美術	・男女関係なく作品を取り上げる。同数程度になるようにする。（女の方が丁寧だ，などと言わせないため←根本的なその人の「よさ」にふれてほしいから）（20 代男性） ・○○と呼ぶこと　作品名は「さん」とつけるようにしている。（50 代以上女性）
保健体育	・「新たな命の誕生」 - 男・女はお互いに尊重しなければいけないこと - 家事の分担などに触れ，女性がやることが多いことに気づかせ，仕事を分担できるように考えさせる。（30 代男性） ・中学生の授業の中での男女共習を大切にしている。技能差や性別差によらない授業（30 代女性） ・バク転を女子にも挑戦させる　男子だけの技，女子だけの技等は分けない。（30 代男性） ・男女混合班で行う。（30 代男性）　など
技術	・授業で男女同じく接している。（50 代男性）
家庭	・家庭生活の題材の中で，家庭との関わり，家族のあり方として紹介したり考えさせたりしたことがある。（ワークライフバランス，M 字型就労グラフ，男女別家事関連時間のグラフなど）（20 代女性）

	・家庭分野で，家庭の役割と家族について扱うときに，男とか女とか性別でなく一人の人として自立していこうというような話をしたり，男性で育休を取った知り合いの先生の話をさせてもらったりしています。（20 代女性） ・家庭科の教育目標である，自立した生活は男女関係ないと思うので，常に自分（生徒個人）はどう考えるか，家庭での実践はどうか？を基準に授業をしているつもりです。（30 代女性） ・家族の仕事の領域の指導の時に男女が協力することの大切さを教えるようにしている。男女平等というばかりが良いとは思わない。状況に応じて考えることのできるようになって実践してほしい。（50 代以上女性）　など
外国語	・授業とまではいかないが英単語でスチュワーデス→ flight attendant，police man→ police officer，Ms→ 未婚・既婚問わず使用する（女性のみ Miss がある点）など男女の区別をしない語がある，程度の話はしたことがあります。（40 代女性） ・history× herstory もあり，chairman× chairperson○，stewardess× flight attendant○（40 代女性） ・生徒に，自分も ALT もすべて○○-sensei と呼ばせている。Mr Ms を使っていません。生徒の呼び方はすべて○○-san（英語であっても呼び捨てにしない，日本語でも英語でも同じように san にしています）（40 代女性） ・「かわいい」だけの文化は外国から見ると自立してない個人，集団とみなされる一面があること。自立した人になるには男も女も共通して弱さを認め強く（？）なれるようよい社会を目指さねばならないこと，男にも女にも優れた人はいて，正当に評価を受けるべきであるということ（50 代以上女性）
道徳	・「男らしさ，女らしさ」とはを主題にして生徒の考えを互いに伝え合う授業 思い込みは視野を狭くすることなどを学習する。（20 代男性） ・人権で差別や偏見の指導，授業を行った。（20 代男性） ・人権教育　身の周りにある差別（30 代男性）　など

その結果，ほとんどの教科で男女平等教育に関する授業実践の回答が見られた。学習内容として男女平等に関するテーマを取り上げていたり，授業の中での生徒への関わり方を工夫していたりする等，様々な場面で男女平等教育を実践していることが分かった。男女平等を具体的な学習内容として取り上げている教科には，社会科，家庭科，道徳での事例が多く見られた。社会科では，公民や歴史において平等権や男女の雇用問題，家庭科では，家族・家庭の役割について，道徳では，性差別や男女平等に関する人権教育の授業実践事例が挙げられていた。本研究では，回答者の中で限られた教科の実践事例を確認したが，今後の男女平等教育の実践においても，教科に限らず，内容や方法における様々な取り組みの可能性が示唆された。

４．終わりに

本研究では，今後の男女平等教育を展望するに当たり，長野県内の中学校教員を対象にジェンダーに関する意識や行動，授業実践等について質問紙調査を行い，その実態と課題を明らかにした。

一般的な性別役割分業意識や学校における性別役割分業意識，生徒に対しての性別役割分業行動の全てにおいて，女性教員の方がジェンダー・フリーの傾向があることが明らかになった。全体的に男女平等に関する理解は広まってきているものの，先行研究の結果と

同様，男性教員における固定的な性別役割分業意識の課題が確認された。

ジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等の参加経験については，参加したことがある教員は，生徒への接し方や授業・指導の場面において男女平等を意識した肯定的な変化が見られた。しかし，多くの教員がジェンダーや男女平等教育に関する研修・講習会等の経験をしていないことが明らかになった。

男女共同参画社会をめざして学校教育の充実を図るためには，まず，男性教員を中心にした固定的な性別役割分業意識の解消，すなわち，意識と行動の改革が重要である。また，より多くの教員にジェンダーや男女平等教育に関する課題意識を持てるよう関連する研修・講習会等の機会の拡大等，さらなる意識啓発の取り組みが必要であると考える。

謝　辞

本研究の調査にご協力いただきました教員の皆様に感謝申し上げます。

文　献

多々納道子・田原泰子（2001）．中学校教員のジェンダー観の形成要因．*島根大学教育臨床総合研究*，1，101-115

苫米地伸（2009）．教師のジェンダーについての意識，教師の属性との関係を軸にして．直井道子・村松泰子編．*学校教育の中のジェンダー－子どもと教師の調査から*．日本評論社．89-103

内閣府男女共同参画局（2016）．男女共同参画白書平成 30 年度版．

長野県（2016）．第 4 次長野県男女共同参画計画

労働政策研究・研修機構（2013）．男女正社員のキャリアと両立支援に関する調査結果．

（2019年 9月30日　受付）
（2020年 2月21日　受理）